

1. 平成25年度研究の成果と課題

昨年度、派遣された政策研究大学院大学では、中学校における学力向上に学校経営のどのような要因がかかわっているかを研究した。その結果、教職員体制や校内研修の在り方について、政策提言を行った。それらのうち、校内研修の在り方については、県教育センターにおける「校内研修を活性化させるためのリーダー育成研修」において、授業改善等を意図した組織的・効果的な校内研修を実施するための研修を実施している。このような研修等を行うことで、学校が質の高い校内研修を実施できるよう継続的に支援していけるのではないかと考える。

また、研究の過程では、データ分析上の課題がいくつか挙げられた。そこで、今年度の実践研究として、昨年度の研究手法を生かし、課題の1つであった生徒の個票データを利用してより精度の高い分析を実現することで、学力向上に向けた方策を見出せるよう研究を行うこととする。

2. 平成26年度研究の目的

高知県教育振興基本計画重点プランに掲げられた重点施策の1つである「キャリア教育の充実」のために、児童生徒の基礎的・汎用的能力と基本的生活習慣、自尊感情、教科の学習意欲及び郷土愛等のキャリア形成と学力との関係について総合的に分析し、教育委員会の施策や各学校の教育活動の検証・改善に寄与する。

3. 研究方法

平成25年度からキャリア教育推進事業（小中学校課）に指定されている推進地域を対象に、平成25年度県教育センターで行ったアンケート調査及び分析により得られたキャリア形成の因子構造に学力を加え、キャリア形成と学力の関係についてデータ分析を行う。データは、推進地域で実施したキャリア形成に関するアンケート調査結果及び平成25年度高知県学力定着状況調査の正答率を用い、分析モデル（図1）を元に、重回帰分析を行った。用いたデータには、小学5年生及び中学1・2年生のデータが存在することから、学年の影響を制御するために、小学5年生及び中学1年生のダミー変数（以下、「学年ダミー」という。）を投入した。なお、統計的分析にはIBM SPSS Statistics 21.0を用いる。

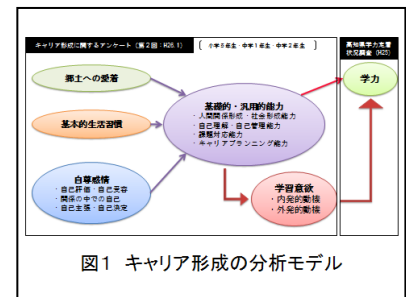


図1 キャリア形成の分析モデル

4. 研究内容

(1) 基礎的・汎用的能力から教科の正答率への直接的な影響

各教科の正答率に対し、基礎的・汎用的能力から直接的な影響がみられるのかどうかを明らかにするために、教科の正答率を従属変数、基礎的・汎用的能力と学年ダミーを独立変数に投入したモデル1からモデル5の重回帰分析を行った（表1）。

その結果、教科の正答率には、いずれの教科にも課題対応能力は正の影響、キャリアプランニング能力は負の影響がみられた。

表1 教科の正答率に対する基礎的・汎用的能力の影響

	モデル1 国語正答率	モデル2 社会正答率	モデル3 算数・数学正答率	モデル4 理科正答率	モデル5 外国語正答率
人間関係形成・社会形成能力	.015	.073	.006	.008	.071
自己理解・自己管理能力	.005	.025	.047	.037	.035
課題対応能力	.202 **	.163 **	.237 **	.161 **	.183 **
キャリアプランニング能力	-.114 **	-.147 **	-.144 **	-.108 **	-.097 **
小学5年生ダミー	.191 **	-	.030	.688 **	-
中学1年生ダミー	.441 **	.417 **	.213 **	.457 **	.336 **
補正R ²	.174	.211	.083	.394	.159
F値	39.334	39.267	17.907	119.213	27.967
サンプル数	1092	716	1092	1092	716

(2) 基礎的・汎用的能力から学習意欲を媒介して教科の正答率に与える影響

①学習意欲から教科の正答率への影響

各教科の正答率に対し、学習意欲が与えている影響を明らかにするために、教科の正答率を従属変数、学習意欲として内発的動機と外発的動機、また学年ダミーを独立変数に投入したモデル6からモデル10の重回帰分析を行った（表2）。その結果、教科の正答率に対し、いずれの教科にも内発的動機は正の影響を、外発的動機は負の影響を及ぼしていた。

②学習意欲に対する基礎的・汎用的能力の影響

次に、内発的動機及び外発的動機に対して基礎的・汎用的能力が与えている影響を明らかにするために、内発的動機または外発的動機を従属変数、基礎的・汎用的能力と学年ダミーを独立変数に投入したモデル11か

らモデル13の重回帰分析を行った(表3)。その結果、内発的動機、外発的動機ともに人間関係形成・社会形成能力と自己理解・自己管理能力が正の影響を及ぼしていた。また、内発的動機には課題対応能力も正の影響がみられた。

表2 教科の正答率に対する学習意欲の影響

	** $p < .01$ * $p < .05$				
	モデル6 国語正答率	モデル7 社会正答率	モデル8 算数・数学正答率	モデル9 理科正答率	モデル10 外国語正答率
国語の学習に対する内発的動機	.167 **	-	-	-	-
算数・数学の学習に対する内発的動機	-	-	.328 **	-	-
学習に対する内発的動機(国語、算数・数学の合成変数)	-	.205 **	-	.157 **	.219 **
学習に対する外発的動機	-.069 *	-.137 **	-.114 **	-.097 **	-.088 *
小学5年生ダミー	.179 **	-	-.030	.667 **	-
小学1年生ダミー	.434 **	.407 **	.189 **	.447 **	.324 **
補正R ²	.170	.215	.128	.393	.154
F値	56.804	66.431	40.981	177.861	44.493
サンプル数	1092	716	1092	1092	716

表3 学習意欲に対する基礎的・汎用的能力の影響

	** $p < .01$ * $p < .05$		
	モデル11 国語の学習に対する内発的動機	モデル12 算数・数学の学習に対する内発的動機	モデル13 学習に対する外発的動機
人間関係形成・社会形成能力	.261 **	.246 **	.161 **
自己理解・自己管理能力	.147 **	.142 **	.140 **
課題対応能力	.343 **	.302 **	.077
キャリアプランニング能力	.049	.012	.000
小学5年生ダミー	.078 **	.158 **	.055
小学1年生ダミー	.046	.068 *	-.010
補正R ²	.480	.406	.109
F値	169.002	125.079	23.167
サンプル数	1092	716	1092

5. 考察

これらの分析結果を元に、学力に影響を及ぼす関係を図2に示す。

分析結果から、学習意欲の内発的動機を高めることで、教科の正答率は向上することにつながるということが明らかとなった。市川(2001)¹によると、子どもたちの学習を支える学習動機は内発的動機・外発的動機の2つに分かれるのではなく、学習内容の重要性や学習の功利性により、6つに分類されるとしている。このように、子どもたちには様々な学習動機が存在し、それぞれが関係し合って学力の向上につながっているのではないかと考えられる。

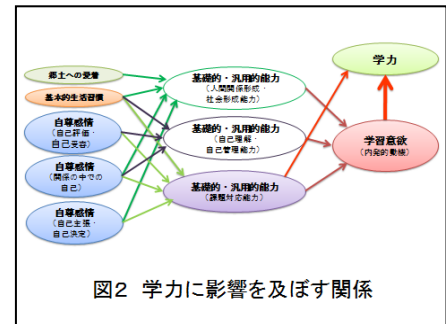


図2 学力に影響を及ぼす関係

また、基礎的・汎用的能力から学習意欲、教科の正答率への影響では、課題対応能力がどちらも有意に正の影響を及ぼしていたことから、課題対応能力を高めることが学力向上につながるといえる。一方、キャリアプランニング能力に着目すると、内発的動機には有意な影響がみられず、教科の正答率には負の影響がみられた。今回の調査で使用したキャリアプランニング能力の質問項目は、将来の夢や目標の有無にかかわる内容が多くを占めている。仙台市教育委員会(2010)²によると、「将来の夢をもっている」とことと学習成績は相関がみられず、「夢をかなえるために勉強する」子どもや「将来の可能性を広げるために勉強する」子どもは、学年が上がるにつれて学習成績との相関が強くなっている。したがって、将来の夢や目標をもっていることにとどまるのではなく、子どもたちが学んでいる学習の意味付けを行い、夢や目標と将来の生活を結び付けることが学力向上には重要であると考えられる。

先行研究、分析結果を元に、学力向上に向けた方策を図3に示す。平成25年度の研究結果と合わせると、郷土への愛着や基本的生活習慣、自尊心が高まることにより、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力が高まり、さらに、学習の内発的動機が高まり、学力が向上する関係がみえてきた。このように、分析モデルを用いることで、一つ一つの要素が点ではなく線でつながっていることが分かる。教員はそれぞれの指導が学習意欲や学力につながっていくことを意識したうえで、子どもたちへの指導を行うことが重要であると考えられる。

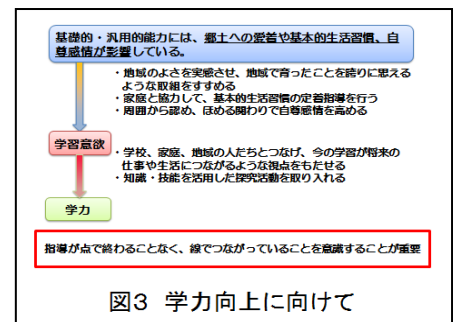


図3 学力向上に向けて

6. 成果と課題

子どもたちのキャリア形成と学力の関係について明らかにすることで、学力につながる指導の道筋とそれぞれの段階に伴う方策についてまとめることができた。しかし、単年度の調査結果であるため、十分な因果関係とはいえない。今後はパネルデータを元に、縦断的にキャリア形成と学力の関係について分析するとともに、子どもたちの様々な学習動機、将来の夢や目標の持ち方と学力の関係についても分析し、さらなる学力向上に向けた方策を見出したい。

参考文献

- 市川伸一(2001)『学ぶ意欲の心理学』PHP新書
- 仙台市教育委員会(2010)「学習意欲の科学研究に関するプロジェクト」
http://www.city.sendai.jp/kyouiku/k-sidou/gakuryokukoujyou/gakusyuyiyoku_project/H22gakusyuyiyoku.pdf